

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

藤本壮介 建築家

Sou Fujimoto / Architect



CREATOR^{NO} INTERVIEW 126

藤本壮介 Sou Fujimoto

1971年北海道生まれ。

東京大学工学部建築学科卒業後、2000年藤本壮介建築設計事務所を設立。2014年フランス・モンペリエ国際設計競技最優秀賞（ラルブル・プラン）に続き、2015、2017、2018年にもヨーロッパ各国の国際設計競技にて最優秀賞を受賞。国内では、2019年、津田塾大学小平キャンパスマスタープラン策定業務のマスターアーキテクトに選定、2020年、2025日本国際博覧会の協会事務局会場デザインプロデューサーに就任。2021年には大分空港海上アクセス旅客ターミナル建設工事基本・実施設計業務 最優秀者に選定される。

主な作品に、ロンドンのサーペンタイン・ギャラリー・パビリオン2013（2013年）、House NA（2011年）、武蔵野美術大学美術館・図書館（2010年）、House N（2008年）等がある。

No

126

藤本壮介 建築家

SOU FUJIMOTO / Architect

世界の豊かさは、曖昧な空間でこそ見つかる。

クリエイターインタビュー

『建築物、道、ランドスケープが溶け合う“間”をつくる』

published_2021.3.24 / photo_tada / text_akiko miyaura

混沌とした現代にあって、人々の生活に、そして世界の街に命を吹き込むような建築を生み出している藤本壮介さん。内と外、自然物と人工物といった一見、両極にあるものをグラデーションを描くように美しく溶け合わせて、同時にそれぞれを際立たせる場所をつくり出しています。今までにない建築物を手掛けながらも、藤本さんがつくっているのは、心地よい空気が流れる時間であり、誰かの人生が豊かになる場所であり、未来を変える力。建築を通して考える都市の在り方や、コロナ禍において感じたこと、これからの都市環境など、さまざまな視点をお話いただきました。

どちらも切り捨てない建築。

建築というのは、世界のあらゆる混沌を引き受けなければならない側面を持っていますが、同時にそこが面白さでもあると感じるんです。例えば、六本木のような、ある種ごちゃごちゃした場所が持つ魅力は、時間をかけてつくられるもの。そこに生まれる街の豊かさって、簡単につくれるものではないんですよね。一方、僕は北海道の自然溢れる田舎で育ってきたので、人工物だけでは何か物足りないというのわかる。僕が育った家は雑木林のような場所にあるのですが、木々が雑然と茂っている中、どっちに行くでもなくウロウロとできるあの感じと、東京のヒューマンスケールのごちゃごちゃした商店街のような場所が、なんとなく似ているようにも思えるんです。

ただ、自然の厳しさを肌感として理解している身からすると、東京は、人工物と自然が適度に溶け合って優しい場がつくられていると感ずることがあるんですよ。東京って人間がいろんなものを小さくあしらって、自分たちの生存を脅かさないようにうまくアレンジすることで、街がかわいらしくできている気がするんです。一方で巨大な建築物の開発が進むと、そのヒューマンスケールの街が失われかねない。でも、巨大さだけが持つダイナミズムもあると考えると、何でもかんでも小さければいいということでもなくて。どちら"が"いいではなく、どちら"も"いい。だからこそ、自然物と人工物の片方を切り捨てるのではなく、小さなスケールと大きなダイナミズムのどちらかでもなく、両方の魅力をしっかり取り込みたいという思いが、建築における僕の出発点になっているのかもしれない。



House N

2008 年、大分に完成した藤本さん設計の住宅。箱で囲われ、建物の内外は入れ子構造になっており、壁のあちこちに光や風を通す大きな穴のような窓がある。

写真：IWAN BAAN



House NA

棚のように積層する薄い床と林立する細い柱を組み合わせ、独創的な空間の構成を生み出した住宅。室内は個室として区切らず、緩やかに繋がっている。

写真：IWAN BAAN

さまざまな要素が溶け合い、"多様な場所"を生み出す。

建築って、いい意味で曖昧な場所をつくることができるんですよね。簡単に言うと、中と外、開放的なものと守られているもの、繋がっているものと離れているもの…… こうやって言葉にすると両極端ですが、それらの両者の間に広がる豊かさみたいなものがあるというか。もっというと、そこには人間が生きていて、人が多く集まる場所もあれば、一人で静かに過ごす場所だってほしい。秩序だってあるものと、秩序がないものの両方に魅力がありますし、シンプルなものによさもあれば、複雑でカオスなものによさもあります。僕は両者が融合することではじめて生まれる"場所の多様さ"のようなものをつくりたいと思っています。

"多様さ"というのは、プロジェクトによっても違いがあります。例えば、場所ごとに積み重ねてきた気候風土や文化的背景も、その土地の過去の歴史や現代の姿も違う。建築をやっていると、ひとつとして同じ場所はないことを実感するんです。さらに関わる人によってプロジェクトの意味合いも変わる。そういったさまざまな要素が溶け合って、"多様=いろいろな場所"が生まれるんですよね。そこでは僕たちはいろいろな選択肢を持つことができる。とても豊かな場所になるのだと感じます。

僕が実現したいのは、多様であると同時に人間にとって安心感があり、一方でどこか予測不可能な面がある場所。人工物はどちらかというと単調になりがちで、すべてが予測可能な方向へいくことが多い。逆に、自然は多様であり予測不可能。だからこそ、人工物と合わさることで、"ちょうどいい何か"が出来上がるんじゃないかと思うんです。ワクワクするようなポジティブな予測不可能性というのは、これからの都市のヒントになる気がします。



published_2021.3.24 / photo_tada / text_akiko miyaura

この場所であればこれしかない。探り当てる感覚。

僕が建築物を建てるとなった時、最初にするのはわりと普通のことなんです。プロジェクトや場所の背景をしっかりとリサーチして、自分がその場に行った時の印象を大切にしつつ、そこで生きる人たちの話を聞く。考えてみると、話を聞いている時にアイデアが浮かんでくることが多いかもしれませんね。最初はとりとめの話なんですけど、ひと言、ひと言によっていろんな形や情景が浮かび、だんだんと結び合わさっていく……というように。一見バラバラに思えるさまざまな印象が、少しずつ繋がって最後にひとつの形となり、空間として落ち着く。天才的な思いつきって本当に稀で（笑）、そうやって徐々に統合していくのが建築のプロセスなのかなと僕は思っています。ただ、ひとつの形になったとはいえ、それはまだ出発点くらいの感覚。それをもとに検証する中でアイデアが変化し、結実していく。最終的に「この場所であれば、これしかない」という説得力に繋がったときに、何かを探り当てたような感覚を得られるんです。

自分の中で「探り当てた感覚」を得られたもののひとつは、南フランスのモンペリエの集合住宅《L'Arbre Blanc》。地中海のそばなのでとても天気がよくて、「冬でもお昼ごはんを外で食べちゃうような場所」というところから、高層マンションではあるけれど「できるだけ大きなバルコニーをつくってみよう」という思いつきがスタートなんです。方法は無限にあるので、さまざまなやり方を試す中で、他の要因も入りながら建築の形に結実していきました。《白井屋ホテル》も「大きな吹き抜けをつくったら面白そうだな」というところからはじまり、クライアントさんと時間をかけてやりとりする中で、どんどん豊かに育っていった感覚がありました。



L'Arbre Blanc

2019年に藤本さんが、フランスの建築家の方々と協働して手がけた南フランスにある集合住宅。L'Arbre Blancはフランス語で「白い木」を表すが、まさに葉が樹木から広がるように配置され、屋外での時間を楽しめる大きなバルコニーに、室内と屋外が連続性を持ったリビングルーム、自然と住人たちの新たな関係性をもたらすようなパブリックスペースの取り入れ方など、これまでにない集合住宅の在り方を示した。

写真：IWAN BAAN



白井屋ホテル / SHIROIYA HOTEL

江戸時代から続いた300年余りの歴史に一度は幕を下ろした、群馬県・前橋にある白井屋旅館。2020年、同じ場所で「白井屋ホテル / SHIROIYA HOTEL」として新たな歴史をスタートさせた。藤本さんがリノベーションを手がけたこのホテルは、建物の真ん中に4階までの大きな吹き抜けを擁し、館内のあらゆる場所と部屋にさまざまなアート作品が飾られている。客室はすべて異なるデザインになっている。

写真：Katsumasa Tanaka

「頑張って探り当てた」という意味では、《武蔵野美術大学 美術館・図書館》がそうですね。最初は「書物の森」のような図書館をつくりたいと思ったものの、なかなか答えにたどり着けず……。空間をさまよい歩いて、いろんな場所、いろんな書物と出会ううちに、「機械的に本を見つけやすい場所というのではなく、散策して歩けるような場所をつくろう」という考えに至ったんです。とはいえ、しっかりと機能的に本を見つけやすいルートは確保し、同時に散策するワクワク感や、予測不可能性を両立させています。最終的には渦巻き状の本棚を置いた、迷路のような空間になっていきました。美大の図書館だったこともあって、様々なインスピレーションを得られて、その場で床に座って本を読みはじめてもいいような、森のような場所になったと思います。



武蔵野美術大学 美術館・図書館

森に迷いこんだような不思議な空気を持つ、美術館・図書館。その内側には、地上2階分もあるという大きな書棚がらせん状に渦を巻く。散策するような感覚をもたらす空間と同時に本来の目的を果たす図書の検索性も併せ持った、唯一無二の芸術的建築物。

写真：DAICI ANO

ポジティブに楽しみ、誠実につくっていく。

僕が大切にしているのは、何をつくりたいか、ではなく、その場所がどうなってほしいか、に耳を澄まし、どうなっていくんだろう、と見守る感覚。思い通りにつくることとはまったく違い、ある種の感触は持ちながらも、先が読めないものをつくっている感じなんです。農作物を育てることに近いのかな。場所や気候によっても、関わる人や手の加え方によっても農作物の出来って変わるじゃないですか。とはいえ、農作物なら「にんじんをつくっている」と分かるけれど、僕らの場合は何を育てているか分からない状態（笑）。「この場所ならではの何かが実ってほしいよな」と願いながら、土の匂いや風向きといった豊富にある手がかりを探っているんだと思います。

建築に関しては、これまでも今もずっと試行錯誤。特に若いうちは何もわかっていなかったんで、自分が考えたようにはいかなかったことも多々あります。もちろん、すべてを全力でやって自分なりに結果を残してきたつもりではいますが、ある意味、流されながらも幸いにして素晴らしいクライアントさんや、素晴らしいプロジェクトに恵まれてきた。それにどんなプロジェクトを依頼されるかは予測できないので、都度、新しいプロジェクトや土地に出会うたび、面白がりながらはじめるということが大切なのかな、と。「ここから、どんな冒険がはじまるんだろう」とポジティブに状況を楽しんで、誠実につくっていききたいということは常に考えています。



藤本 壮介 建築家

SOU FUJIMOTO / Architect

published_2021.3.24 / photo_tada / text_akiko miyaura

現代の都市は、建物と道がはっきりと分かれすぎている。

現在は東京の事務所とパリのアトリエを拠点にしているので、自然とその2都市に滞在する時間は長くなります。どちらにも愛着がありますし、「戻ってきた」という安心感があります。ニューヨークはなじみのある街ではないのですが、東京、パリと同様にいいと感じる街の一つ。その3都市ってそれぞれに違うアイデンティティがあるけれど、ヒューマンスケールと都市ゆへのダイナミズムみたいものの両方がうまく連動していて、すごく好きなんですよ。



Mille Arbres

パリにも自身の事務所を構え、東京と行き来しながら精力的に活動をしている藤本さん。代表作のひとつと言える南フランスの集合住宅《L'Arbre Blanc》はもちろん、まるで宙に森が浮かんでいるような複合施設《Mille Arbres(1000本の樹)》などを手掛ける。パリを含むヨーロッパ圏でも高い支持を受け、精力的に活動をしている。

画像：SFA+OXO+MORPH

ヴェネツィアやドゥブロヴニクといった、小さなエリアにすべてが詰まっている小宇宙のような都市にも惹かれます。ただ、自己矛盾してしまいましたが、もし2つの街が東京の中にポコンとあったら、さほど惹かれないのかもしれませんが。美しい海に囲まれた島というのがやはり良いですね。そもそも街って住んでいる人も宿泊している人もいて、市役所のようなパブリックな場所もレストランや商店もある場所。巨大都市にその全部が詰まっていることに不思議はないけれど、小さな街にも同じようにすべてがある、あの多様性が凝縮している感じが好きなんだと思います。歩いて巡れるというのも良いですね。人間と都市がちゃんと連続している感じがある。

また、東京の街はほぼ人工物しかないんだけど、ある種、有機的なつくられ方をしていて、多様さと調和がちゃんとある。ヒューマンスケールの街がそのまま巨大都市になり得ている、とても稀有な存在のような気がしています。そこが大きな魅力ですが、今後そういう場所であり続けるのかといえば、どうやらそうはいかなさそうだなとも感じる。我々建築家の責任もありますが、大きなコンクリートの塊みたいなものがどんどんできると道も単調になり、風景もなんとなく硬く見えてしまうんです。

これは僕の考えですけど、今は建築物と道、その間のランドスケープと言われる場所が、はっきり分かれすぎていて、もったいないと思うんです。建築が道のようになってもいいし、道が建築のようになってもいいし、ランドスケープが道と溶け合ってもいい。私有地と公共の道路の区切りが曖昧になってくるのは、法律や制度などを考えると非常に厄介ではありますが、東京ミッドタウン、六本木ヒルズくらいの規模の開発であれば、中に都市的な意味での道も自由につくれるはず。そう考えると、今後の開発は道と建築物と、地形やグリーンといったランドスケープが混然一体となって溶け合い、そのどれとも違う新しい場所のつくられ方をしていくんじゃないかと思うんです。

商店街のごちゃごちゃ感を、都市のスケールで。

そうすると、いままで道も建築も遠慮して何となく取り残されていた、"間の場所" みたいなものがつくられる可能性が広がって、より街が豊かになると思うんです。僕が魅力を感じる商店街のようなごちゃごちゃした場所って、道と建物の間にお店の商品が並んでいたり、勝手に植木鉢が置かれていたり、日常の中で無意識的に拡張されていった場所な気がするんです。それをもう少し大きなスケールで、意識的にやっていくと建物も道の風景もまったく変わるはず。例えば、道なのか洞窟なのかわからないような建造物があり、そこに川が流れていて、実は川下にはライブラリーがあって、道の代わりに川を伝ってそこに行く、みたいな。そうやって、境界線なくごちゃごちゃ組み合わさった場所をつくれたら面白いですよ。

それが東京の中心地・六本木だとなおいいなと思います。これは僕の印象ですが、六本木は地形がちゃんとある街だと感じるんです。地形は人工的につくるわけにはいかないので、その場所のアイデンティティの骨格を成すものになる。かつ、六本木は街自体のアイデンティティがしっかりしているので、周囲との関係の中で場をつくっていけるのが大きな強みですよ。結局、新しい場所ができて、自立して自閉的に立っているのでは意味がない。周りの街と共鳴しながらも、同時にその中に特別な世界が広がっているからいいんだと思うんです。あと、小さな公園もかわいくていいかもしれません。不思議な公園が急に街の中にあって、子どもたちが密かに遊んでいるような、そんな場所が六本木にあったら楽しいと思います。



藤本 壮介 建築家

SOU FUJIMOTO / Architect

published_2021.3.24 / photo_tada / text_akiko miyaura

人間的な秩序を失う制約のある社会から選択肢を増やす都市づくりへ。

昨年、僕が参加させてもらった《UNIQLO PARK 横浜ベイサイド店》も不思議な公園なんです。3階建てで1階がユニクロ、2階がGU、3階には両店の子供服が売っていて。例えば、GUに行きたい人は店内からエスカレーターで2階に上がってもいいけど、公園の一部である外の階段をのぼって直接入ってもいいんです。GUのあとに3階でキッズの服を買って、帰りは公園の滑り台を降りて駐車場に向かってもいい。まさに公園と建物、パブリックと私有地の縦割りの区分が、いい意味で溶けちゃっているんですよね。



UNIQLO PARK 横浜ベイサイド店

横浜ベイサイドマリーナを望む、地上3階建てのユニクロの店舗。建物の斜面全体が公園になっている。「今までにないお店を作ってほしい」という要望を受けて試行錯誤する中、アイデアのひとつとして作った階段を擁した店舗の模型を見た、佐藤可士和氏の「これいいね」というひとことで方向性が決まったそう。階段をのぼる行動を促すため「子どもの遊び場にしたらいいんじゃないか、デカイ滑り台があったら面白いんじゃないか」とコンセプトが生まれていきました」と藤本さん。

©Nacása & Partners

そもそも都市の成り立ちは、いろんなものが集まっていて選択肢が増えるということだと思うんです。でも、これだけ都市化が進むと選択肢が増えているのか、いないのかもわからない状況になっている。特にコロナ禍で感じるのが、選択肢が狭まることの窮屈さ。人間って、こうしなくてはいけないという生き方には向いてなくて、「今日はここでごはんを食べよう」「今日はこのへんで仕事をしようかな」と自分の意思で選択できることから、豊かさが出てくる気がするんです。

一方では「これはダメ」「こうあってください」と限定、制限することで物事を整理整頓して、何とか秩序を保とうとしているのが人間社会でもある。たしかに見せかけの秩序はそれで保たれるかもしれないけれど、果たして人間的な秩序が保たれるのか。そう考えると、今後は限定するより選択肢が増える方向に向かうのがいいんじゃないかと思うんですよね。先の混然一体となって溶け合いながら共存する街であれば、あれをやっていい、これもやっていいと選択できる環境に繋がる。こうじゃなきゃ、ではなくて、あれもいいしこれもいい、という考え方。それは多様な価値観とともに共存することでもあるし、自分の選択肢も広がる。それがポジティブに成立している状態がデザインできれば、街や建築がよりよいものになるように思います。

さらに、その中で野心的な開発の試みがどんどん起こるといいですよね。僕が今参加させてもらっている《TOKYO TORCH》では、超高層ビル「Torch Tower（トーチタワー）」の上層階に丘のようなものをつくっています。本来は普通に高層ビルを建てれば、何の問題もなくいいものができるんですよね。でも、「未来に向かって何かチャレンジをしたい」という思いが事業者さんにある。コロナ禍も影響しているかもしれませんが、そういう思いの事業者さんやディベロッパーさんが増えている気がするんです。「このまま同じように街をつくってもよいのだろうか」という根本的な疑問がみんなの中に生まれている。それは現状を否定する意味ではなく、街がもっと面白くなれるんじゃないかというポジティブな思いであり、街の新しい可能性をみんなで開こうとしている表れ。そういう意味で、すごくエキサイティングなプロジェクトだと感じています。



TOKYO TORCH

東京駅前で行われている開発プロジェクト。"次世代を担う3名のデザイナー"のうちの一人に選ばれた藤本さんは、300m 超の高層ビル「Torch Tower（トーチタワー）」の頂部デザインを担当。藤本さんは「今後人々のための場所がどう拡張していくのかを考えた時、"上空300m に浮いている丘" みたいなものがあってもいいんじゃないかと三菱地所設計さんと一緒に思いついたんです。丘って斜面なので身体的ですし、本来1階、2階と分断されてしまう場所が、緩やかに繋がれるんですよね」と話す。

画像提供：三菱地所設計

個人が共鳴し合い形づくる現代の社会像。その先にある未来の建築。

さらに時代が進み2050年くらいになると、自然と都市環境の共存の仕方が必然的にテーマになるはず。今は建築にグリーンを入れるというのが、ようやくはじまった黎明期。なのでとりあえず、ダイレクトに樹木を建物に載せている。近未来には、単にグリーンを載せるだけではなくて、内部と外部の関係の仕方や、先ほどの Torch Tower のように丘のような地形的な要素、さらには建築自体もより多様で複雑なものが可能になり、結果として建物自体が地球の延長のようになってくるかもしれない。

今も昔も、僕の一番大きな関心事は「人間のための場所」。狭義の建築というより、人間が活動する今後の生活環境がどうなっていくのかという関心が常にあるんです。個人と個人の関係が繋がり合って社会になり、情報テクノロジーだとかいろんな概念が入ってきて、さまざまな関係が生まれるわけですね。それが時代精神となり、社会像を大きくつくっていく。その社会像と今後つくられる建築は、やはり切っても切り離せないものだと思うんです。人間の社会の成り立ちとか、人と人との関係性がどう動いているかが、今後の建築に直結するので、広い意味で関心を持ちつつ、都市環境や生活環境の未来に思いを馳せているという感じです。

その中でも普遍的なものは何かと考えると、すごく難しいですよ。人間の体の形は変わらないものとして捉えていいのかなと思う時もあるのですが、人を取り巻く状況がすごい勢いで変化していることを考えると、そもそも普遍的なものがあるのかという疑問に行き着く。ただ、今僕らが 2000 年前の建物を見て「やっぱり、すごい!」となることを思うと、今僕たちがつくっているものが、2000 年後の人間にも何かしら感じてもらえるものはあるのかなと考えたりもします。そのためにも、常に自分の意識が更新されて新しい発見があるほうがいいのかなと思っています。実際さまざまなプロジェクトに関わるたび、この世界の豊かさを発見するような感覚がある。だから、僕は今もなお設計を続けているのだと思います。

取材を終えて

ご本人は「自然溢れる場所で育ったので、自然そのものにあまり憧れのようなものはないんですよ」と笑っていましたが、藤本さんのつくるものは、人間が勝手に線を引いた自然と人工という"境界"を優しくなじませて、自然に対して素敵なプレゼントをそっと添えているように感じます。もちろん人に対しても。ぶっ飛んだ天才とはまた種類が違うけれど、藤本さんにはやはり天才性がある。静かな天才であり人格者。この先も見たことのない場所を私たちに見せ続けてくれるのでしょうか。(text_akiko miyaura)